

文科系留学生のキャリア形成意識が日本での就職に及ぼす効果

—要 旨—

鈴木 洋子

日本が受け入れている外国人留学生（以後、留学生）が、留学修了後のキャリアを考える際に日本での就職を選択することが増加している。留学生 10 万人計画を達成し、受入れ方針を 2003 年「数ではなく良質の留学生」という方針に転じた現在、質の向上を望むには留学生が留学修了後も満足いくように支援していくことが重要な視点であり、彼らの望む留学修了後の進路が日本での就職ということであればそれを支援していくことになる。一方、就職はしても短期で転職をする、あるいは帰国してしまうというケースも多い。その原因として、留学生が日本企業文化に馴染まない、就職に満足していないことが一因だと考えられる。留学が満足いくものであってもそのあとのキャリア形成がうまくいかず、日本留学に対する評価が下がってしまう結果になっては、本人はもとより留学生を受け入れたわが国にとっても不幸なことである。留学生が満足いく就職を果たすには、彼らの日本就職に対する意識がさまざまな面で高いものであれば、実際に就職をしてからの不満が減るのではないだろうか。

理系の場合は修士課程で技術や専門知識を活かして就職するというケースも多く専門が進路に関して大きな要素になることが多い。しかし文系の場合、就職に専門が関係することはそれほど大きくないだけに、ミスマッチしないような就職にはどうしたらよいか明確ではない。よって本研究では文系の留学生の留学修了後のキャリア形成について、留学生がどのように考え、どのような意識が満足いく就職に繋がるのかを探った。

そのために、留学生一般と日本での就職活動をしている留学生の意識の違い、また留学生一般と就職率の高い教育機関に在籍する留学生の意識の違いなどを、アンケート調査、面接調査から分析した。

留学生の 40%以上が留学後は日本で就職をするというキャリアプランをもって来日してくるが、実際に就職活動をしている留学生は、来日前から日本での就職をきめていた学生の方が多い。

一方、留学中の留学生は「日本での就職を絶対したい、できたらしたい」とする留学生が 59%も存し、来日前は母国での就職あるいは未定であった者で留学中に日本就職を決めた者が多いことが分かった。留学してから日本で就職を決めた約 70%は、日本（人）に対する意識（感情）がよくなったとしている。しかし留学修了者の約 30%が日本就職を果たしているだけである。

以上のように留学前の意識が日本での就職というキャリア意識がある者が 4 割以上いること、そして留学中に日本でキャリアを形成しよう決心する者が多くいることが、実質的に日本での就職を成就させ、留学ビザから就労ビザに在留資格変更が許可される人数の増

加に繋がっていることが分かった。

また留学先の教育機関の就職支援の取り組みにより留学生の日本での就職意識が上がり実際の就職率も高い事例もみた。そして専門学校留学生は日本での就職の意識が強いことも分かった。アルバイトでの経験が日本での就職意識を高める、あるいは日本での就職に対する自信をつける例も面接調査でみた。

採用側に対する調査では、就労ビザの取得に関して法的な改善を望む声も大きいですが、定着率を高めることが留学生採用の促進につながるようである。それには留学生が満足いく就職をすることが前提であり、それは留学生自身がキャリア形成に対しての意識を早期から持って努力することから始まるということである。その方向付けなどの面で教育機関、留学生教育に関わる者をはじめ、政府や産業界も意識的になることが必要である。